奥田孝晴　編著
『三訂版　グローバリゼーション・スタディーズ　～国際学の視座～』

（2012年、創成社）

評者：日吉　昭彦*

本書は、文教大学国際学部の講座「国際学入門」の教科書として採用されている書籍で、2005年に出版された「グローバリゼーション・スタディーズ（入門編）」から二度にわたる改訂を経て新たに刊行されたものである。

編著者である奥田孝晴国際学部教授は、本書冒頭で「国際学とはいったい何を学ぶ学問なのか」という問いを示しているが、本学国際学部教授陣（山脇千賀子、椎野信雄、海津ゆりえ、井上由佳）に加え、批評理論を専門とする静岡県立大学国際関係学部の藤巻光浩准教授および神奈川県藤沢市の小学校で日本語指導教室を担当する今津文美教諭の計７名の執筆者が、17章の多様なテーマの論考とともにその問いに挑む。奥田教授は、また本書は「国際学の現場を訪ねる旅のガイドブック」であるとも述べているが、各論考からは多彩な専門分野を持つ執筆者の研究フィールドの地平の広がりがリアルに感じられる。そして、新たな知の旅と冒険に読者をいざなう。国際学を学び、そのフィールドを歩まんとするものにとっては、まさに必携のガイドといえるだろう。

本書では、まず国際学を「行動のための叡智」と捉え、地球市民としての「われわれ関係」を築きあげる参加・行動型の「知の運動」としての視座を示している（第１章）。

次に1492年に着目した二つの論考が続く。一つは、コロンブスの新大陸「発見」にまつわる二義性を丁寧に読み解き、近代的世界の成立過程に批判的な視座を示す論考である（第２章）。「もうひとつの1492年」と題された第３章は、口語文法典の編纂年に着目する。話し言葉に書き言葉の権威を付与することになる口語文法典を題材に、民族的・宗教的均一化を促す支配のためのことばの道具性と、植民地主義者のまなざしを内面化することばの政治性を考察する。

近代日本が「在日韓国人・朝鮮人問題」とどのように向き合ってきたのか（第４章）、近代日本が太平洋を囲む国々と経済的な相互依存関係をどのように強めてきたのか（第５章）、その歴史的な解説からアジアとの関係を問う二つの章では、アジアを見つめ、共に生きる道を模索し、「アジア太平洋市民」としての自覚を持って国際的な課題に対処する必要性が指摘されている。

第６章では、近代ヨーロッパ社会の成立過程において、自然化され、無自覚になっているいくつもの二分法の線分を明示していく。植民地を隔てる線分や国家や国民の境界線、人種や性別観などが取り上げられ、社会制度が機能するようになる歴史的な経緯が詳しく解説されている。第７章は、近代ヨーロッパにおける市民社会の成立過程をマクロな歴史的観点から解説したものだ。著者は、この章のなかで、アンラーン（unlearn）という学びの姿勢を紹介している。「過去の経験にとらわれないよう、意識的に学習知識を捨て」「自然のものだと自明視してしまっ

＊文教大学情報学部准教授

ている自然概念が、自然ではないと気付いて、その概念の成立・形成の歴史的／社会的メカニズムを学び直してみる」ことがアンラーンの姿勢であるという。

旅の変容を考察する「グローバリゼーションと観光（第８章）では、北半球に偏る人の移動傾向や、既知のシンボルの確認となりリアリティからかい離する旅などについて取り上げ、グローバル化された国際観光の時代を批判的に捉える。またこの章には、オキナワを題材にして、世界の構造化された不条理について考える長編のトピックスが付いている。

ここまでが大きく第一部となっており、以下、第二部が続く。第二部は、博物館における異文化理解展示にみるステレオタイプ化の問題から始まる（第９章）。続いて、ガラパゴス諸島とボルネオの観光政策の成功事例から、持続可能な社会運営システムの構築を目指すエコツーリズムの理念が示される（第10章）。第11章は、「食」がテーマとなっている。ナショナル・アイデンティティと食の関係や、食にみる文化的なハイブリッド性の読解、フェアトレードやスローフード運動にみるグローバリゼーションへの抵抗などから展開する文化論だ。これにポピュラー音楽論が続く。第12章は、やや文章スタイルが異なり座談会形式になっているのも特徴だ。ワールド・ミュージックを題材に、文化のクレオール化の側面や、一方で商品化される際に行われるジャンル分類の暴力性などに話題は展開する。

1990年代に急速に外国籍児童・生徒が増加し、「国際化」が進んだ教室の現場から、グローバル時代の教育の具体的な取り組みを紹介するのは、冒頭で紹介した藤沢市の小学校で日本語指導教室を担当する今津文美教諭だ（第13章）。「宇宙船地球号カリキュラム」という小学校の教育プログラムの実践事例から、教育活動を通じた地域社会における日本人と外国籍の人々との相互関係の形成とその重要性が示されている。

3.11以降の大きな日本の社会変動とその時代を生きる私たちが、本書のこれまでの論考に触れたとき、何を考え、そして、どのように将来を模索するのか。本書「グローバリゼーション・スタディーズ」が、三訂版として改訂するなかで、このテーマは避けられないものであろう。第14章は、このテーマに取り組んだ「“核”と市民社会」と題された論考である。本書の展開する「国際学」の学びを、現代社会でまさに今起こっている出来事に応用できることが、本章を読めば理解できるであろう。その意味では、三訂版として改訂した本書の一番の特徴は、本章にあるのかもしれない。

第15章では「グローカリゼーション」の概念が、映画の解題の形式でわかりやすく紹介されている。第16章は、国際協力のイメージの裏腹にある発展途上国への無理解や無思慮、傲慢な姿勢などを批判し、バングラディッシュでのマイクロクレジットの取り組みを事例として、共同的自助の概念を紹介している。

最終章の第17章は、ワークショップ形式でコミュニティのデザインに挑戦する教材になっている。４重の円を描き、その円の中心から外延に向かって「自分、他者、地域、自然」をプロットし、将来と課題をそれぞれマトリクスで埋めていく「コミュニティ・タマネギ」という名称が付いているユニークな教材だ。

以上、各章ごとの簡略な内容の紹介となってしまったが、非常に多岐に渡る充実した内容が掲載されており、「国際学」という学びのアプローチの多様性を、分かりやすく多角的に理解できる魅力的な教科書といえるだろう。それぞれの章ごとのねらいやまとまりも分かりやすく、学習者にとって読み進めやすい編集になっている。

一方、本書の魅力は、本論の内容だけではない。各章には「ディスカッションのために」と題された著者からのアジェンダ（課題）が用意されている。

たとえば、「在日韓国人・朝鮮人問題」を題材としてアジアとの関係を問う第４章では、「私たちはアジアの国々、アジアの人々に対してどのようなイメージをもっているだろうか。またそ

れはどのような理由によるものかを、話し合ってみよう」というアジェンダで議論が行えるようになっている。なかには、「ワールド・ミュージックのコーナーに沖縄音楽が含まれていたCD屋さんを見つけた人は、教えてください」といったユニークなアジェンダもある。授業の運営の補助として用いるだけではなく、著者の顔をイメージしながら、課題を密かにこなしてみるといった読後の楽しみがあるのも本書の魅力の一つだ。

本書を教材として学習する上では、各章ごとに設けられたキーワードが学習の整理に役立つだろう。本文中に、しばしば相互参照のマークがついており、他章で言及のあった部分と関連する部分や他章の読解で理解がより深まる部分などが明示されているのも、授業の際に用いる教材としては大いに役立ちそうである。

学生時代に、こんな教科書がほしかった、と思わせる、たくさんの仕掛けにあふれた一冊だった。